

会誌の発刊に寄せる

著者	馬瀬 良雄
出版者	長野県ことばの会
引用	ことばの研究 1: (1980)
発行年月日	1980-09-20
URL	http://hdl.handle.net/10091/00022334

会誌の発刊に寄せる

代表理事 馬 瀬 良 雄

最近、私は松本で一般市民を対象に方言について数回にわたってつたない話をした。最終回に一時間足らずの茶話会があった。その際、こんな発言をする主婦がいた。

私のしゅうとめは南信の飯田の出身だった。私はしゅうとめのことば遣いがいやで、いわれもない蔑視をし、彼女自身をも大変誤解していた。今回それがとんでもない誤りであったことに気づいた。

又、次のような述懐をする女性もいた。

松本に来て、ソーカイネなどと応答する商人のことばを聞くと、ひどく侮辱されているような感じがして、いやだった。だが、この地方で「カイ（または「カエ）」が同等以上の者に対して使うことばであり、軽い敬意と親愛の気持を含んでいることを知ってハッとした。東京の「カイ」とは違うんだということ、それから語形が東京語と同じで意味・用法がずれている場合が方言にはあるということを知った。我々は、いつも自分のことばを正しい尺度として、他人のことばを律しがちである。地方都市に住む者が都市周辺のことばに対するとき、又、東京に住む者が地方のことばに対するとき、それは特に強くなる。

元来、ことばそれ自体には優劣の差はない。それがあるかのように見えるのは、その背後にある政治・経済・文化などの諸力の差によってである。我々は地域の方言に接するとき、それは難しいことではあるが、自らの尺度を捨て、その方言の尺度によって考えるゆとりが必要である。そしてその上に立って相手が我々に何を伝えようとしているかを的確に汲みとることが要求される。もちろん、この態度は相手側にも同じように必要なのであるが。

しかし、お互いに相手が伝えようとしている内容を、ことばとしては理解したとしても、お互いがスムーズに意志の疎通がはかれるかというに、必ずしもそうではない。どちらか一方が、あるいは両者が表出されたことばとは別の意図を抱いて発言しているような場合である。結局スムーズなコミュニケーションのために必要なのは、相互信頼であり、その上のみそれは成り立ちうる。最近、話しことばの技術的な面が強調されており、それはそれとして大変結構なことであり、ぜひ必要なことであるが、根底にある「人間」の問題を忘れてはなるまい。

長野県ことばの会は発足以来順調な歩みを続け、五回の研究会を持ち、会員数も次第に増加し、今回、長野県ことばの会会誌『ことばの研究』の創刊号をお届けできる運びとなった。寄稿された方々をはじめ、会員の皆さんの御協力にお礼を申しあげる。

(信州大学人文学部教授)